



市民が撮った東日本大震災 3.11 キラクのキロク 写真展

人と防災未来センターでは、2012年12月26日より、2013年3月17日にかけて「市民が撮った東日本大震災『3.11 キラクのキロク』写真展」を開催いたしました。市民から寄せられた東日本大震災の写真をもとめ、後世に残す活動をしているNPO法人20世紀アーカイブ仙台の協力のもと、同法人が出版した写真集『3.11 キラクのキロク』から、宮城県を中心に市民の方々から寄せられた写真約300点を展示いたしました。今号では、写真展と関連イベントを中心に、資料室の取り組みをご紹介します。

本展の第一章では、2012年3月にNPO法人20世紀アーカイブ仙台が発刊した写真集『3.11 キラクのキロク 市民が撮った3.11大震災記憶の記録』より、沿岸部、市街地、山間部を含む、宮城県各地で撮影された写真約300点をパネル展示しました。

市民自身の手によって撮影され、提供された写真は、震災の惨状が映し出されるとともに、震災と向き合いながら生活する人々の強さと、ありのままの日常が映し出されています。また、一見すると震災写真とは思えないような和やかな食卓の風景や、美しい草花の写真もあります。東日本大震災から2年が経とうとする今、この展示を通して、市民の目線で見た被災地を知り、今後も被災地に思いを馳せていただけるきっかけになったのではないのでしょうか。



写真展会場の様子(2階防災未来ギャラリー)



「兵庫」の市民が撮った3.11写真展(5階資料室)

第二章では、東北の被災地へ向かった、かつての被災地「兵庫」の市民らから提供された写真を、写真にまつわるエピソードとともに展示しました。

阪神・淡路大震災が発生した1995年は、「ボランティア元年」と称されるほど、草の根の市民活動が盛んに行われました。18年前の震災を経験した「兵庫」の人々は、様々な支援を通して、東北の被災地を見てきました。この展示によって、彼らの活動を知るきっかけになると同時に、活動の合間に撮影した写真を見ることで、彼らの目から見た被災地とそこに暮らす人々の生活を垣間見ることができます。

2013年2月9日(土)14:00より、『3.11 キラクのキロク』写真展の関連イベントとして、トークセッション「3.11を撮ること」を開催いたしました。『3.11 キラクのキロク』編集者であり、ご自身も写真を撮り続けている佐藤正実さん、『キラクのキロク』の写真提供者として、仙台市より、衛藤雅之さん、齋藤高晴さん、石巻市から中山奈保子さんをお迎えし、東日本大震災以降に、ご自身で撮影された写真のなかから、「3.11を撮る」という観点で選んでいただいた写真の解説をしていただきました。そして、東日本大震災を写真によって記録することについて、また、写真を通して後世に残し、伝えることについて、かつての被災地、神戸の人々と議論が行われました。トークセッションの詳細内容は、資料室ニュース2ページをご覧ください。



フォトトークセッション「3.11を撮ること」

フォトトークセッション「3.11を撮るということ」

2013年2月9日、『3.11 キヲクのキロク』写真展の関連イベントとして、トークセッション「3.11を撮るということ」を開催しました。写真集の編集者である佐藤正実さん、写真提供者として、仙台から衛藤雅之さん、齋藤高晴さん、石巻から中山奈保子さんをお迎えし、東日本大震災以降に、ご自身で撮られた写真の解説をしていただきました。そして、震災を写真という形で記録することについて、また、写真を通して後世に伝えることについて、かつての被災地、神戸の人々と議論が交わされました。ここでは、トークセッションで交わされた言葉の中から、ゲストの方々の印象的な言葉をピックアップしてご報告します。阪神・淡路大震災に関する市民の方々から寄せられた資料の収集・保存・展示・活用を行う当センターは、今後も、東日本大震災の市民の記録と連携しながら、災害伝承を考えていきます。

(震災資料専門員 高森順子)

● 今の光景だけを見ても、被災の状況はわからない (佐藤正実さん)



佐藤正実さんは、写真集『3.11 キヲクのキロク』の編集者として、市民から寄せられた多くの写真を目にする立場に身を置きながら、ご自身も写真を撮影しています。現在取り組まれている「定点観測写真」を中心に、解説をしていただきました。佐藤さんは、被災直後と1年以上経過した写真の定点観測写真を紹介するなかで、「今、被災に遭った場所を巡る観光ツアーなどがあり、それは良いことだと思う。ただ、今の光景だけ見ると、被災にあった状況が分からないのではないか。新しい住宅が立つ前の更地のようになってしまおうと思う。定点観測写真を残すことは、震災がどのようなものだったのかを残すために、とても重要なことなのではないか」と述べていました。

● かつて家だった場所、花壇に主はいないが、花が咲いている (衛藤雅之さん)

衛藤雅之さんは、撮影を続けるなかで、タンポポや水仙、桜、つくし、向日葵といった、自然の芽吹きに目を向けられていった状況を述べられました。「仙台市は東西に広いため、4月下旬あたりになると、市街地はだいぶ落ち着きを取り戻していました。そんななかで、撮るものはないかな、と沿岸部へ向かいました。タンポポや水仙といった草花が、かつて家だった場所、その花壇に、主はいなくなったんだけど、花が咲いている。その状況に衝撃を受けました。また、水田に流れ着いた桜の木が、塩水のなかでも花を咲かせている様子は、とても違和感を感じる風景です。思わずシャッターを押した、ということです」。衛藤さんには、その他にも、仙台市街で被災直後に見られた様々な地域からの支援の形を、警視庁のパトカーや大阪の心斎橋商店街から提供されたイルミネーションなどの写真をもとに、ご紹介いただきました。



● 同じカメラ、同じ自分の目で、どちらの光景も見ているということを、不思議に感じる。いまだ消化しきれない思いがある (齋藤高晴さん)



齋藤高晴さんには、被災直後にカットを続ける美容師の写真や電話ボックスに並ぶ人々など、被災後の市街地の人びとの様子を写した写真を中心にご紹介いただきました。これらの写真は、一見すると日常の写真のように思えるものです。齋藤さんは、最後の一枚として、閑上地区の惨状の写真を紹介していただき、「自分が同じカメラで色んなものを撮っている。どちらの光景も見ている。そのことを不思議に感じる。いまだ消化しきれない思いもありながら、写真を撮っているという状況です」と述べていました。

● 町の風景は一向に変わらない。子どもたちはそんななかでも、すくすくと成長していく。その様子をこれからも撮り続けていきたい (中山奈保子さん)

中山奈保子さんには、石巻の自宅が津波に遭い、自宅の一階が浸水し、二階へ逃げたことで難を逃れた、その時の様子を撮影した写真をご紹介いただきながら、当時の緊迫した状況を詳細に述べていただきました。そして、被災後の写真として、中山さんのお子さんの成長記録であり、同時に、町の変化を映し出している写真をご紹介いただきました。中山さんは、「町の風景は一向に変わらないです。でも、子どもたちはそんななかでも、すくすくと成長していきます。町のなかにいる子どもたちの写真を撮り続けることが、子どもたちにとって、町に希望を持つことができるきっかけになれば、と思っています」と述べていました。



ワークシート「気象災害への備え」を 新設／冊子になります！

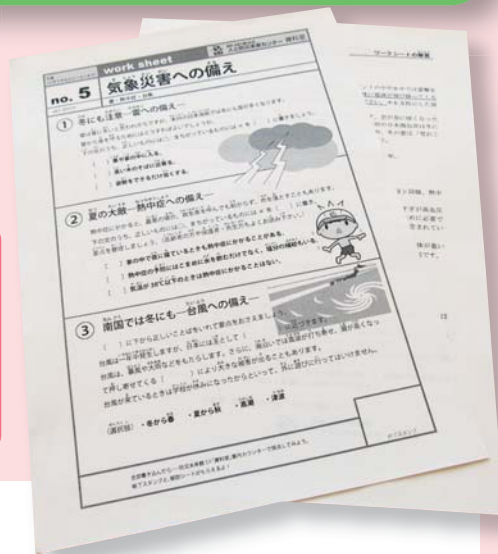
小中学生の学習の一助として資料室で作成し、配布しているワークシートに新しく「気象災害への備え」を設けました。

今後、ワークシートは使いやすい冊子としてもまとめられます。

前回の資料室ニュース(49号)では試作品をお見せしましたが、今回はワークシートができるまでの試行錯誤をお見せします。

ワークシート
「気象災害への備え」
です。

問題用紙は
インターネットからも
入手できます。



1. 夏や秋だけではありません！

梅雨^注は沖縄・奄美では5～6月ごろ、本州・四国・九州では6～7月ごろ、台風の日本上陸が多いのは8～9月ですが、気象災害には一年中、注意が必要です。

例えば、雷は夏に多いと思われがちですが、冬にも発生することがあります。

北陸・山陰のみなさんはとくに、“雪起こし”という言葉をご存知でしょう。冬の雷は大雪の兆しかもしれません。

雷は前々回の資料室ニュース(48号)で取り上げたように大雨などとも関係します。

気象災害には一年中注意が必要ということはどう伝えるのか、試行錯誤がありました。

ある暑い日の昼

青空ですが、
実はこのあと、
雷雨になりました。
熱中症にも注意！



ある雪の日の朝

こんな日はむやみに
自転車に乗らない
ようにしましょう。
とくに夜は危険です。



注 梅雨について

沖縄では“小満芒種(スーマンボースー)”，韓国では“長霖(チャンマ)”，中国では“梅雨(メイユ)”などと呼ばれ、必ずしも“ツユ”と呼ばれるわけではありません。

2. “サイクロン” は不正解!?

台風の問題は当初“台風は()や()と同じ熱帯低気圧です”とし、()に入る解答を“サイクロン”と“ハリケーン”とするつもりでした。

テレビでも海外の災害としてたびたび出てくるサイクロンを英語で書くと“Cyclone”で、日本では“Cyclone”といえば熱帯低気圧を指すことが一般的です。

しかし！“Cyclone”を英和辞書で調べてみてください。

そう！“Cyclone”は低気圧という意味で、海外では熱帯低気圧のみを指す語句ではないのです。もし、資料室で試行錯誤していなければ、国際的にみて“不良品”を出してしまうところでした。ちなみに熱帯低気圧を英語で書くと“Tropical Cyclone”になるそうです。

参考文献 黒岩宏司「サイクロンの定義とは」『天気』58, 1013-1018, 日本気象学会

ワークシートno.3「津波ってどんなもの？」も今回、問題・解答ともに部分変更しました。
みなさまからの「こんなワークシートがあったらいい」というリクエストもお待ちしております！

(震災資料専門員 谷岡能史)

震災当時の映像資料と「僕の震災日記」

神戸市東灘区魚崎に在住の末岡健司様から、阪神・淡路大震災の記録映像のDVD 6本をご寄贈いただきました。その中には、震災が発生した直後の魚崎地区の様子や、ご遺体を捜索している様子、避難所での生活の様子など、とても生々しい映像が記録されています。阪神・淡路大震災での住民の視点から記録された映像としては、大変貴重な資料となっています。肖像権や個人情報等の関係で一般の方が閲覧するにはハードルが高い資料ではありますが、個人情報保護に十分に配慮した形で特別利用申請により資料を閲覧できる場合がございます。

また、映像記録を基に、末岡様ご自身が「僕の震災日記」というアニメーションを作成されました。この資料に関しては、一般の方でも申請をすれば閲覧することは可能です。この資料のお問い合わせについては、お気軽に資料室のスタッフにお声かけください。

資料室展示のお知らせ

「震災からよみがえった東北の文化財展」連動企画 阪神・淡路大震災の文化財レスキュー・修復保存関連資料展示

展示
終了

人と防災未来センター東館3階で開催された「震災からよみがえった東北の文化財展」にあわせ、資料室では連動企画として、2012年12月12日～2013年1月27日まで、阪神・淡路大震災における文化財の修復保全作業や被災した寺社仏閣の復興の記録が掲載された図書資料の展示、ならびに阪神・淡路大震災で被災した生田神社や酒蔵の被災写真と復旧・復興過程の写真をパネルにして展示しました。

企画展と連動した資料室の展示を開催したことで、「震災からよみがえった東北の文化財展」で東日本大震災で被災した文化財について展示を見学された方が、資料室に立ち寄っていただき、阪神・淡路大震災において文化財がどのように被災して、どのように修復されたのかについて、併せて見学された方が多くいらっしゃいました。また、阪神・淡路大震災での文化財に関するお問い合わせが多くありました。



震災記録漫画「ねえねえしてたあ？」原画展

2013年2月1日～2月9日まで、写真集「3.11キヲクのキロク」の写真提供者であり、2月9日の写真展関連トークセッションにもゲストとしてお越しいただいた中山奈保子さんの体験を元にした震災記録漫画『ねえねえしてたあ？』の原画展が行われました。震災体験を子どもたちに伝えていくために、漫画という表現を選び、各地で展示、読み聞かせ会を行っています。『ねえねえしてたあ？』は冊子として資料室に開架しておりますので、お気軽に資料専門員にお尋ねください。



展示
終了

東日本大震災復興まちづくり展 開催中

2013年3月からは「東日本大震災の復興まちづくり展」と題し、東日本大震災の被災自治体の復興計画や、被災地域の将来像のパネル、復興まちづくりの論点が書かれている書籍等を展示し、東日本大震災での被災地域において目まぐるしく動く復興まちづくりの現状について展示を通してお伝えします。

このように、資料室では独自の展示や、人と防災未来センターの企画展と連動した展示を今後とも行っていく予定です。

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター 資料室(西館5階)

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

HPアドレス <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30～17:30(展示スペースとは時間が異なりますので、ご注意ください)

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) 12月29日～1月3日

資料室は無料で
ご利用いただけます